

# 1926年27年における魯迅の民衆像と 知識人像についてのノート（下） ——魯迅の民衆像・知識人像覚え書（3）

中 井 政 喜

I、はじめに

II、『朝花夕拾』『華蓋集統編』等における社会像・民衆像・知識人像等（以上、第39号、40号）

III、四・一二クーデターの衝撃と国民革命の挫折（以下今号）

IV、さいごに

## III、四・一二クーデターの衝撃と国民革命の挫折<sup>1)</sup>

前述のように、1926年7月、北伐が開始され、国民革命の情況は破竹の勢いで進展していた。しかし1927年4月12日、国民革命軍総司令蒋介石が上海で四・一二クーデターを起こし<sup>2)</sup>、同年4月18日、南京国民政府を樹立し、同年9月に、武漢国民政府は崩壊して、国民革命が挫折した。

1926年10月、魯迅は許広平からの書簡をとおして、国民革命の「策源地」広州における、学生の状況、教育界の状況が何ら理想的なものではなく、またそこで国民党左右両派が衝突闘争する様相に驚いている。1927年1月広州に到着し、中山大学に赴任して以後も、広州の社会、学生運動に対する魯迅の評価は厳しかった。魯迅は、「革命の策源地」広州社会が基本的に旧社会の社会意識が改革されていない社会、上からの革命が行われた、軍人と商人が支配する社会であると認識している<sup>3)</sup>。

1927年4月四・一二クーデター以後の国民革命の挫折の意味を、魯迅は

どのようにとらえたのだろうか。その後やがて魯迅は、その意味を次のように考えたと思われる。上層の金持ちの支配階層と国民党右派（蒋介石を中心とする）が結びつき、中国共産党や進歩的学生、国民党左派、左派の労働者・農民を裏切り、彼らを弾圧し虐殺したものである、と。蒋介石の南京国民政府は、旧社会を維持する強力な新しい軍閥として出現した、ととらえられたであろう。それゆえに魯迅にとって、これ以後、中国変革ために資することのできる文学は、後述のように、誰にとってもあたりさわりのないことを主張するのではなく、現在の社会と文化に具体的に關わる文学、そして権力構造の問題もその視野に含む文学（直接に蒋介石の政治権力を問題として取りあげるのではないとしても）であった。すなわち、旧社会の改革を目指し、現実にも有効に作用する（民衆に対しても）具体的な課題を含む文学でなければならないとされた、と思われる。第三章において上記のことを述べたい。

### 一、青年一般に対する、無条件の畏敬・信頼の破綻

青年一般に対する、進化論に基づく無条件の畏敬・信頼の破綻の決定的確認は、四・一二クーデターの経験以後のことであると思われる。この事件の中で、青年が同じ世代の青年を容赦なく殺戮した。

「私はいままでまだこの〈恐怖〉を仔細に分析していません。しばらく私自身がすでに診断して明らかな一、二のことを言いましょう。

第一に、私の妄想は破綻しました。私はいままで、いつも樂觀をもっていました。青年を圧迫し殺戮するものは、たいいてい老人であると思っていました。こうした老人がだんだんと死んでいけば、中国は必ず比較的に生氣をもつことができる。現在私はそうではないことを知りました。青年を殺戮するものはむしろたいいてい青年であるようです。しかもかけがえのない他人の生命と青春に対して、いささかも大切に思わない。（中略）血の遊戯はすでに始まり、役者はまた青年であり、得意げな色もあります。」（「答有恒先生」、1927・9・4、『而已集』）

以前の、進化論に基づく（生命の進化に対する内的努力を受け継ぐ<sup>4</sup>）青年一般に対する魯迅の無条件の畏敬・信頼は、この1927年4月に決定的に破綻したと思われる。ここであらゆる青年（あるいは後の世代）が必ずしも一人の人間として、老人より進化した、より優れた存在である、とは考えられなくなったのであろう。これ以前、例えば「長明灯」（1925・2・28、『彷徨』）、「頹敗綫的顫動」（1925・6・29、『野草』）、「孤独者」（1925・10・17、『彷徨』）において後の世代（幼い子ども）に対する懷疑が表現された<sup>5</sup>。その懷疑は、1926年末頃、青年文学者高長虹等による魯迅批判によってより強められた可能性がある。ただ、青年文学者に対する失望は、文学青年に対する懷疑（あるいは裏切られた献身者としての魯迅の復讐感）であっても、青年一般に対する、無条件の畏敬・信頼に対する懷疑までを意味するものではなかったと思われる<sup>6</sup>。そして1927年4月四・一二クーデター以後において、進化論に基づく青年一般の優れた点に対する無条件の畏敬・信頼は決定的に懷疑された。この時点で無条件の畏敬・信頼の破綻を確信している、と思われる<sup>7</sup>。これ以後魯迅は、青年を一人一人の個人として測るようになった。例えば「怎麼写」（半月刊『莽原』第18・19期合刊、1927年10月10日、『三閑集』）で、魯迅は四・一二クーデターの犠牲となった中山大学の学生畢磊に対する好ましい印象と哀惜を述べた。すなわち魯迅は四・一二クーデターの経験の中で、青年一般に対する、無条件の畏敬・信頼を破綻させたけれども、四・一二クーデター以後において、そのとき犠牲となった実際に畏敬・信頼に値した一人の青年畢磊を尊重している<sup>8</sup>。

また、進化論そのものについて言うと、魯迅は「這個与那個」（1925・12・8、『華蓋集』）、「古書与白話」（1926・1・25、『華蓋集統編』）で、人類の進化について言及する。

「人類は結局のところ進化している。また章士釗総長によれば、米国のどこかでは進化論を語ることを禁じている。これは実に私を驚愕させる。しかし禁止することはひたすら禁止するとしても、進むことは必ず進むもの

だ。」(「這個与那個」、1925・12・8、『華蓋集』)

魯迅は、進化論的な展望において人類の進化を信じ、そして進化の道において自己自身が橋梁的存在、中間物的存在(否定的側面と肯定的側面を含めて)であることを疑わなかった(「写在『墳』后面」、1926・11・11)。

1927年四・一二クーデター後、魯迅は「文学和出汗」(1927・12・23、『而已集』)で次のように言う。

「人間性は永久に不変であるのか。

類人猿、類猿人、原人、古人、今人、未来の人……もしも生物がほんとうに進化するのであれば、人間性が永久不変であることはできない。類猿人は言わないまでも、たとえ原人の気質であれ、私たちは推測しうることが困難である。私たちの気質も、おそらく未来の人は必ずしも理解しないだろう。」(「文学和出汗」、1927・12・23、『而已集』)

魯迅は1927年12月の段階で、類人猿から今人にいたる人の進化を前提にして、人間性の歴史的変化を議論している。

ゆえにこのような事情を見ると、おそらく、1927年四・一二クーデターによって魯迅の進化論に起こったことは、魯迅における進化論の全面的破綻ではなかった。後の世代(青年)一般に対する無条件の先験的畏敬・信頼(後の世代の優れた点が中国変革の礎となりうるという意味で)が、すなわち社会改革の展望に進化論を適用した一側面が、崩壊したものである、と考える。のち魯迅は次のように言う。

「私には創造社に感謝しなければならないことがある。それは彼らが数種類の科学的文芸論を読むように私を〈押しやり〉、以前の文学史家が山ほど説いて、なおもつれてははっきりしない疑問を理解するようにさせたことである。そしてこのためにプレハーノフの『芸術論』を訳し、私の——私のために他人にまで及ぶ——ただ進化論だけを信ずるという偏頗を救い正した。」(『三閑集』序言、1932・4・24)

この文章からすれば、魯迅は進化論を否定するのではなく、進化論だけを信ずる偏りから、救われたことを言う。魯迅にとって、老人に比較して青

年・若い世代がより優れたものとして無条件に畏敬・信頼し、そこに社会改革の契機を見るところという偏頗を改めた。すなわち中国変革の道筋・方法の過程に進化論を適用することを正した<sup>9</sup>。しかし生物としての人類を理解する場合、生物学としての進化論（自然淘汰、生存競争、生物の進歩）を否定していないと思われる<sup>10</sup>。そして魯迅は1928年以降、マルクス主義文芸理論を本格的に受容していく過程において、階級存在を明確に認めていくことになった<sup>11</sup>。社会組織を考える場合には、当時の中国の階級闘争の事実に基づいて（1929年頃、魯迅は四・一クーデターを階級闘争の現れと理解する）、すなわち史的唯物論に基づいて考察できるようになった。

以上のことに基づけば、魯迅は生物学としての進化論を基礎として、生物学としての進化論を継承しつつ（それを生物の進化をあらゆる自然科学の思想とし、従来の社会改革の過程にも適用する偏頗・不十分な側面を補正して）、他方マルクス主義文芸理論を受容していった、と私には思われる<sup>12</sup>。

瞿秋白は次のように言う。

「魯迅は進化論から階級論へと進みはいい、紳士階級の反抗児・二君に仕える者から、無産階級と労働大衆〔原文は労働大衆——中井注〕の真の友人、そして戦士に進みはいった。」（瞿秋白、『魯迅雜感選集』、上海青光書局、1933・7、底本は上海文芸出版社（1980・2））

瞿秋白のこの言及を解釈する場合、私は魯迅が進化論から単線的にマルクス主義に移行したと理解しない。私は、本来の生物における進化論を基礎にしつつ、社会科学としてのマルクス主義を受容していったと解釈する<sup>13</sup>。言い換えれば、第一に、魯迅は進化論を社会改革の過程に適用して理解するところから生ずる社会分析の「偏頗」（後の世代或いは青年を無条件に老人より優れたものとし、そこに中国変革の担い手を期待しようとする）を脱却した。そして「新興的無産者」（労働者階級のこと、「『二心集』序」、1932・4・30）に変革主体を見るようになった。第二に、魯迅の前期における社会構造分析の不十分さ（金持ちとそれに抑圧される弱者の二つ

の階層として社会構成をとらえる)を、史的唯物論に基づくより精密な階級分析によって克服していった、と理解する<sup>14</sup>。それが、上述の「『三閑集』序言」(1932・4・24)の意味であると考え。私は、以上の経過を魯迅の社会観の発展、社会観の質的变化であると考え。

## 二、自己の文芸に対する懐疑と課題

### 1、自己の文芸に対する懐疑

四・一ニクーデター以後、魯迅は「答有恒先生」(1927・9・4、『而已集』)で次のように言う。

「私はかつて言ったことがあります。中国は昔から食人の宴席を列べているものであり、食べる者がいて、食べられる者がいる。食べられる者もかつて食人したことがあります、まさに食べようとする者も食べられるかもしれない、と。しかし私は気づいたのです、私自身も宴席を列べる手伝いをしている、と。(中略)中国の宴席には〈酔蝦<sup>すいか</sup>〉があります。蝦<sup>えび</sup>が生きて新鮮であればあるほど、食べる人は喜び、愉快に思います。私はこの酔蝦の助手です。まじめで不幸な青年の頭をはっきりとさせ、彼の感覚を鋭くします。万一不幸にあったとき、彼に二倍の苦痛をなめさせ、同時に彼を憎むものたちにこの生き活きとした苦痛を賞玩させて、格別の楽しみを与えるのです。」(「答有恒先生」、1927・9・4)

この考え方は、『労働者シェヴィリヨフ』(『工人綏恵略夫』、アルツイバーシェフ原作、魯迅訳、1920年10月22日訳了、商務印書館、1922・5)における人道主義者アラジェフに対するシェヴィリヨフの批判に淵源がある。その批判の内容は、第一に、理想家による理想の高唱と、子孫に約束する黄金時代の夢に対する批判である。言い換えれば、現実<sup>15</sup>に苦しむ者に対して何も与えるものがないような、現実に対する理想家の無策についての批判であった。第二に、高唱された理想を受けとる人は、美しい理想を信ずるようになるがゆえに、耐えがたい現実に対していっそう鋭い苦痛を感じなければならない。

人道主義者アラジェフは、耳が不自由で美しい娘オーレンカに、修道院に入るという美しい夢を見させ、彼女の心を高尚な夢と理想で満たした。しかしオーレンカは生活のために、肉欲に満ちた小商人と結婚せざるをえず、その彼女のためにアラジェフは救いの手を伸べることができない。アラジェフの理想の高唱は、彼女の苦痛をいっそう鋭く耐えがたいものにしたにすぎない。シェヴィリョフはこのように人道主義者・理想主義者アラジェフを批判する。

その後、この考え方は、執拗に魯迅の心から離れることがなかったと思われる。「頭髮的故事」(1920・9・29、『呐喊』)のN氏は次のように慨嘆する。

『「現在君たち理想家どもは、女性は髪を切れとか、そこで騒ぎたてて、またなんの得るところもなく苦しむ人をたくさん創りだそうとしている。」』

『いますでに髪を切った女性がいて、このために学校に合格することができず、或いは学校から除名されたのではないか。』(中略)

『私はアルツィバーシェフの言葉を借りて君たちに問わなければならない。君たちは黄金時代の実現をこれらの人々の子孫に約束した、しかしこれらの人々自身に与えるどんなものがあるのか。』

N氏は、青年たちが理想家の啓蒙を受け、その理想を信じ行動するがゆえに、現実のなかにおいてかえっていっそう不幸な境遇に陥ることを言う。しかし、『『呐喊』自序』(1922・12・3、『呐喊』)では、それにもかかわらず、啓蒙者の道をやはり歩きはじめようとする魯迅の気持ちが語られる。『「もしも鉄の部屋があって、まったく窓がなく壊すのが極めて難しいものであるとする。中にはたくさんの熟睡している人がいて、まもなく窒息死するだろう、しかし昏睡から死亡するので、決して死にいく悲哀を感じない。いま君が大騒ぎをして、比較的意識のはっきりした数人をたたき起こし、この不幸な少数者に救いがたい臨終の苦しみを受けさせるとすれば、君はむしろ彼らに申し訳がたつと思うのか。』

『しかし数人が起きた以上、その鉄の部屋を壊す希望がまったくないと、君は言えまい。』

そうだ、私は自分なりの確信があるけれども、しかし希望を言うことになれば、抹殺できないことだ。なぜなら希望は将来にあり、必ずやないという私の証明で、彼らのいわゆる可能性の有ることを説得できないからだ。そこで私は結局文章を書くことを承諾した。」(『呐喊』自序、1922・12・3)

魯迅は否定しがたい希望に基づいて、啓蒙的な文章を書いた。また、1924年頃以降魯迅は、自らの啓蒙活動がたんなる理想の空唱(「黄金時代の実現」の夢)とならないように、中国の現実に根ざした、青年知識人の覚醒と育成に取り組んだ<sup>15</sup>。

しかしながら、中国旧社会においては、青年知識人の覚醒と育成自体も、彼らの不幸と苦痛を増すものとなる可能性があった。そのことが1927年4月の段階で魯迅によっていっそう尖鋭に再確認された、と思われる。1927年4月四・一二クーデターに、その免れがたいと予測した不幸な結果を、まさしく見ることになる。しかしながら、魯迅はさらに次のように言う。「私はこれから話したい何らかの言葉がないかもしれないと思う。恐怖が去って、来るものは何なのか。私はまだ分からない、恐らく良いものであるとは見えない。しかし私も私自身を救いつつある、一つには麻痺であり、二つには忘却である。抗いながらも、なおこう考える、こののち薄れいく『淡い血痕の中で』すこしものを見ては、紙に記したい、と。」(『答有恒先生』、1927・9・4、『而已集』)

魯迅は麻痺と忘却によって自らを救いつつ、すこしものを見ては、紙に記す活動をしようと言う。

## 2、これまでの文学活動が民衆にとどかなかったこと

また魯迅は、これまで自己の文芸に効力がなかった、そして自分の批評が民衆にとどかなかったという点について、次のように言う。



「要するに、現在もし八方平穩無事な『子どもを救え』〔「狂人日記」〈1918・4・2〉の言葉——中井注〕というような議論を發するのであれば、私自身が聞いても、中味がないと感ずるようになった。

また、私が以前社会を攻撃したことも、実際はつまらないことであった。社会は私が攻撃していることを知らなかった。もしも知ったならば、私はとっくに死んで身を葬るところがなかった。試しに社会の一分子陳源の類をすこし攻撃したら、どうであったのか。いわんや四億であったら。私が生を盗んで生きているのは、彼らの大多数が字を知らず、そのことを知らないからである。また私の話も効力がなく、一矢が大海に落ちるかのようであった。さもなくば、何篇かの雑感で、命を落とす可能性があった。民衆の悪を罰する心は、決して学者や軍閥に劣らない。近頃私は悟りました、改革性をもつ主張が、もしも社会と関わらないならば、『無駄話』として残ることができる。万が一効力があれば、提唱者はたいがい苦しむか、或いは身を滅ぼす災いを免れない、と。古今中外、その道理は同じである。現在のことでは、呉稚暉氏も一種の主義をもっているのではありませんか。呉稚暉氏は、天下の人がこぞって憤ることにならないばかりか、『打倒せよ……嚴重に処理せよ』、と大呼することができる。それは、赤党は共産主義を20年後に実行しようとするものであるのに、彼の主義は数百年後になってから行うものであり、このことから見るに、無駄話に近いためであります。』（「答有恒先生」、1927・9・4、『而已集』）

これまでの自己の文芸に効力がなかったという反省によって、魯迅は二つの点を取りあげる。第一に、批判が一般的抽象的な仕方止まること、誰にとっても平穩無事な、遠い将来において実現されるような批判であれば、現実において効力がなかったとした。取りあげる課題は、当たり障りのない遠い将来のことではなく、現実の課題を具体的に提起することが必要であった。言い換えれば、問題を現実の課題として取りあげるが必要であった。「現在もし八方平穩無事な『子どもを救え』というような議論を發するのであれば」（「答有恒先生」、1927・9・4、『而已集』）、或いは数百年

後に実行する可能性のある主義の主張であるのなら、それは現実的意味がないとした。

また第二に、批判の矛先が民衆にとどくものでなければならない。批判の矛先が現実に民衆にとどき、民衆がそれを批判として理解する必要がある、と考えた。このようにしてこそ、自己の文芸が民衆に対して効力をもつことになる。

魯迅は上の点をふまえて、以下の課題を考える必要があったと思われる。①どのようにして、一般的抽象的でない具体的な課題をもつ文芸活動を行うことができるのか（文芸活動の手段、ジャンルの選択について、例えば雑文の重視）。そして、②どのようにして効力をもって、民衆の現状を批判し、啓蒙することができるのだろうか（民衆啓蒙のための文芸の手段・方法の選択について、例えば連環画等の採用）。

この二つの課題こそ、1927年四・一二クーデター以後、魯迅の文芸活動において新たに解決すべき大きな課題となった、と思われる。

①の問題に関して言えば、魯迅は「関于知識階級」（1927・10・25講演、『集外集拾遺補編』、193頁）で雑感文（或いは雑文）の効用について次のように述べる。

「私に創作をするように勧め、雑感を書いてはいけないとする人たちの中には、数人の人はべつの意図があって、私に罵られたことがあるためである。だから私に二度と雑感を書かないように求める。しかし私は彼に従わなかった、そのために北京についにいられなくなり、厦門の図書館のうえに隠れなければならなかった。」（「関于知識階級」、1927・10・25講、『集外集拾遺補編』）

逆に言えば、魯迅は、例えば雑文・雑感文を書くことが、現実の具体的課題と有効にかかわる一つの方法であることを、北京での女師大の闘争をつうじて認識したと言える<sup>16</sup>。

また②の問題に関して言えば、読者の概念を導入しつつ、民衆の文化水準に適合した啓蒙の内容・手段（連環画等）を追求していくことになる<sup>17</sup>。

3、「文芸与政治的岐路」(1927・12・21講演、『集外集』)をめぐって  
四・一二クーデター後、1927年12月上海にて、魯迅は「文芸与政治的岐路」(1927・12・21講演、『集外集』)という講演を行い、文学者(知識人)と政治権力と社会の関係について言及する。文学者は現状に不満をもち、政治権力に抵抗するものであり、この点で、文学者と革命は方向を同じくする、と言う。

「私はつねづね、文芸と政治権力〔原文は政治——中井注、以下同じ〕は往々衝突するものだと思います。文芸と革命はもともと相反するものではありません。両者の間には、むしろ現状に安んじないという共通性があります。思うに、政治権力は現状を維持しようとし、自然と現状に安んじない文芸と異なった方向にある。しかし現状に安んじない文芸は、19世紀になってから起こったもので、短い歴史があるだけです。」(「文芸与政治的岐路」、1927・12・21講演、『集外集』)<sup>18</sup>

歴史的に社会が発展し、大国ができ、その社会の規模が大きくなる。そのとき現状に安んじない文芸が現れる。

「大きな国になると、内部状況がずいぶんと複雑になり、多くの異なった思想、多くの異なった問題を抱えます。このとき文芸も起こり、政治権力と絶えず衝突します。政治権力は現状を維持し、それを統一させようとします。文芸は社会の進化を促し、それをだんだんと分化させようとします。文芸は社会を分裂させますが、しかし社会はこのようにして始めて進歩するのです。」(「文芸与政治的岐路」、1927・12・21講演)

政治権力者は、現状に安んじない文学者を邪魔者とし、これを追い出したり、殺害する。

「或る文芸を語る派は、人生を離れ、月よ花よ鳥よと語ることを主張します(中国はまた異なっていて、国粹の道徳があり、花よ月よさえも語ることを許されませんので、別に論じなければなりません)。或いはもっぱら〈夢〉を語り、もっぱら将来の社会を語ることを主張しますが、あまり話が近すぎではいけません。この種の文学者は、象牙の塔の中に隠れていま

す。しかし(中略)〈象牙の塔〉は人間界に置かれており、やはり政治権力の圧迫を受けなければなりません。」「(「文芸与政治的岐路」、1927・12・21講演)

「中国はまた異なって」いるという魯迅の言及は、当時、蒋介石の政権の下で、「風月を語り、女性を語ることは、どうであろうか。やはりだめである。これも〈不革命〉であって、〈不革命〉は無罪であるけれども、しかし正しくない。」「(「扣絲雜感」、1927・9・15、『而已集』)という状況を指示している。また、北京には社会を描く文学者を軽蔑する高尚な文人がいたが、しかし今や南方に逃げてこなければならなくなった、と言う。こうした高尚な文人も社会の外にいることはできず、逃げだした。いかなる文学者も、社会状況の中にあり、その政治権力と無縁ではありえなかった。上の引用文は、「文芸与政治的岐路」における議論を文学と政治権力に関する原理論として読むよりは、まず当時の中国の社会状況、政治状況に基づいて発言した状況論として読まれるべきであることの一つの証拠となる<sup>19</sup>。

「文学者の話は実際はやはり社会の話である。彼は感覚が鋭敏で、早く感じとり早く言いだすにすぎない(ときには、あまりにも早く述べて、社会さえも彼に反対し、排斥する)。(中略)政治家は文学者が社会混乱の扇動者であると考え、彼を殺せば、社会が平安となると心中に思う。文学者を殺しても、社会はなお革命を求めることをご存じない。ロシアの文学者は殺されたもの、流刑にあったものは少数ではないが、革命の炎は至るところで燃えたのではないか。」「(「文芸与政治的岐路」、1927・12・21講演)

文学者の思想上における感覚は、三、四十年の差がある。しかし社会がついに変化し、文学者は先知先覚であったとされる。しかし革命がまさしく行われているとき、文学を作る暇はない。

「私は広東で、以前或る革命文学者(現在の広東は、革命文学でなければ文学を作っているとは見なされません、『打て打て打て、殺せ殺せ殺せ、革命せよ、革命せよ、革命せよ』でなければ、革命文学を作っているとは見なされません)を批判したことがあります。私は決して革命は文学ととも

にあることはできないと思います、文学の中には文学革命もありますけれども。しかし文学を作る人は必ずすこし暇でなければならない、まさしく革命の中であって、どうして文学を作る暇があるでしょうか。」(「文芸与政治的岐路」、1927・12・21 講演)

ここの「打て打て打て、……」という革命文学は、蒋介石南京国民政府の下での「革命」を支持する「革命文学」であった<sup>20</sup>。そうした「革命」がまさしく行われているときに、「革命」文学を作る暇はないとする。

「革命が成功した後、すこし暇ができます。或るもの〔文学者——中井注〕は革命にお世辞を言います、或るものは革命を賞賛しますが、これはすでに革命文学ではありません。彼らが革命にお世辞を言い賞賛するのは、権力をもつものを賞賛するので、革命と何の関係がありましょうか。

このとき、感覚の鋭敏な文学者がいて、また現状に不満を感じ、また出て口を開こうとするかもしれません。かつて文学者の話は、政治革命家も賛成しました。革命が成功してみると、政治権力者はかつて反対した、それらの人が用いた古い方法を改めて採用します。文芸家においては不満に思わざるをえませんが、また排斥されなければなりません、あるいは彼の頭が切り落とされます。(中略)——19世紀から現在まで、世界の文芸の大勢は、大体このようなものでした。」(「文芸与政治的岐路」、1927・12・21 講演)

話は一九世紀以後の世界の大勢を話題とするとしながら、鲁迅はおそらく、四・一クーデター以後、蒋介石が政治権力を把握した「革命」後の状況を含めて、示唆している内容と思われる。

「十九世紀の後半には、〔文芸は——中井注〕完全に変わって、人生の問題と密接な関係をもつようになりました。私たちが読むと、まったく気分が良くないように感じますが、しかし息もつかずに読みつづけなければなりません。これは、以前の文芸がほかの社会を書いているようであり、私たちは鑑賞するだけでしたが、しかし現在の文芸は私たち自身の社会を書いており、私たち自身さえも書きこまれているからです。小説の中で社会を

発見することができますし、私たち自身を発見することができます。以前の文芸は、対岸の火事を見るようで、なんら切実な関係がありませんでした。現在の文芸は、私たちさえもこの中で焼かれ、自らが必ずや深く感じとります。自分が感じとることになると、必ずや社会に参加しようとしします。」(「文芸与政治的岐路」、1927・12・21講演)

「十九世紀は、革命の時代と言うことができます。いわゆる革命とは、現在に安んぜず、現状に満足しないものすべてそれです。文芸が古いものの漸次消滅するのを促すのも革命です(古いものが消滅してこそ、新しいものが生まれることができます)。文学者の運命は、自分が革命に参加したことで、同じように変わるものではなく、やはりいたるところで障害に出会います。いま革命勢力がすでに徐州に到達しました。徐州以北で文学者もともと立ちいくことができませんでした。徐州以南で、文学者はやはり立ちいきません、すなわち共産化すると、文学者は立ちいきません。」(「文芸与政治的岐路」、1927・12・21講演)

これも当時、蒋介石政権下で北伐が継続され、その「革命」勢力が徐州に到達したあとの、徐州以南の共産化した文学者の境遇に言及する。

「革命文学者と革命家はまったく異なったものだと言うことができる。(中略)軍閥がいかにも不合理であるかと悪口を言うのが、革命文学者である。軍閥を打倒するのは革命家である。(中略)革命のとき、文学者はみな夢を見て、革命が成功したらどのような世界があるかと考える。革命後、彼が現実を見ると、全くそのようなものではない。そこで彼はまた苦しまなくてはならない。このように叫び、泣き、喚いても、成功しません。前に向かって成功せず、後ろに向かって成功しない。理想と現実は一致しない、これが定められた運命です。」(「文芸与政治的岐路」、1927・12・21講演)

「革命文学をもって自認するものは、必ずや革命文学ではありません。世の中にどうして現状に満足する革命文学がありますでしょうか。麻醉薬を飲まない限りは。ソビエト・ロシア革命以前、二人の文学者がいました、エ

セーニンとソーボリです。彼らはともに革命を謳歌しましたが、後になって、彼らは自分が謳歌し希望した現実の碑におつかり死にました。そのとき、ソビエトは成立したのです。」(「文芸与政治的岐路」、1927・12・21講演)

現状に満足する革命文学とは、一つには蒋介石政権のもとで、蒋介石の「革命」を称える「革命文学」を指すのであろう。

「しかし、社会はあまりにも寂しいです。このような人がいてこそ、面白いと感じます。人類は芝居を見るのが好きです、文学者は自分で芝居をして人に見せ、あるいは縛られて首を切られ、或いはすぐ近くの塀の下で銃殺され、すこし賑やかにすることができます。まさに上海の巡捕が棒で人を殴るとき、みんなとり囲んで見るように、彼ら自身は殴られたくないのですけれども、人が殴られるのを見るのは、むしろたいへん面白いと感ずるのです。文学者とは自分の皮と肉で殴られているものです。」(「文芸与政治的岐路」、1927・12・21講演)

これは、蒋介石政権の下での「革命」に幻想を打ち砕かれた、この「革命」に批判的な文学者の、中国社会における運命を語ったものである、と言える。この意味において、これは1927年12月における状況論である。しかし暴君治下における犠牲者が、暴君治下の臣民によって賞玩される構図は、初期文学活動の1907年頃から1928年頃まで魯迅の作品に現れる構図である。その意味においては、原理論的側面を無視できない。しかしそれは1929年以降には出現しない構図であり、最後の終曲部に属するとも言うべきものであったと思われる。

1926年から1928年にかけて、魯迅の文芸に関する基本的考え方は、前述したように、転換期にあったといえる。例えば第一に、魯迅は、1920年代はじめ頃以来、文学が自己(内部要求、個性)に基づくものであり、同時に社会(とりわけ旧社会の規範)から自立したものと考えた。そして自立した個人としての自己に基づいてこそ、社会認識がありうるとした。そのため自己に基づく文学と、宣伝は、二律背反の関係としてとらえた。しか

し1927年初め頃、魯迅は文学者の生き方・文学の内容と、社会が、切り離しがたく結びついている、と指摘した(「魏晋風度及文章与薬及酒之關係」、1927・7・23、26、『而已集』)。また1928年4月頃、魯迅は文学が社会現象の一つであることを認めるようになる(「文芸与革命」、1928・4・4、『三閑集』)。社会現象として社会に現れる文学には、作者の主観的意図のいかんに関わらず宣伝としての作用があり、そのため宣伝としての文学がありうることを認めるようになった。第二に、魯迅は、1926年27年頃、文学が基づく、自立した個人としての自己について、その属する階級は変わることができない、と考えた。それゆえ労働者階級ではない魯迅は、労働者階級に働きかけるのではなく、自己の属する階級に対して批判を加える方法を選択した(有島武郎と同じように)。しかし1929年頃において、魯迅は知識人の階級移行を認めるようになり、社会変革・階級闘争における知識人独自の役割を認識するようになっていった。すなわち、文学の基づく自己自体が、変化しうる、と認めた<sup>21</sup>。

このような魯迅の思想的転換期において、「文芸与政治的岐路」(1927・12・21講演、『集外集』)で述べられた考え方(文学と政治権力と社会の關係について)を、原理論の側面から文学に対する不変的な魯迅の考え方をのみ抽出して見るのは難しい、と私には思われる。1927年頃の魯迅の文章に対する丸山昇氏の指摘のように、まずそれらを状況論として読むべきであると思われる。すなわち魯迅は、蒋介石政権の「革命」が成立し支配する政治状況の中で、旧社会の社会意識が変革されない中国旧社会という社会状況の中で、中国変革を願望する文学者の運命を語った、と考える。

例えば、私は、1926年から1927年末以前において、「革命人がものを作りだせば、それこそ革命文学である。」(「革命時代的文学」、1927・4・8)という考え方は、時期によって魯迅の対面した革命文学の内容を異にするとはいえ、そこに原理論的側面が伏在すると考えた。なぜならこの考え方は、1926年3月の「中山先生逝世后一周年」(1926・3・10、『集外集拾遺』)と1927年10月の「革命文学」(『民衆旬刊』第5期、1927・10・21)に見ら



れるからである<sup>22</sup>。

しかし前述したように、1926年から1927年末以前において、原理論として伏在したこの考え方自体は、1929年頃以降、魯迅が知識人の階級移行を認めるようになり、革命運動における知識人独自の役割を認めるようになって以後、再び出現することはなかった。このことからすれば、「革命人がものを作りだせば、それこそ革命文学である。」（「革命時代的文学」、1927・4・8）という考え方は魯迅によって、1926年から1927年末以前において階級移行を不可能とする前提のもとに、原理論的側面を伏在させつつ、「革命」と「革命文学」の内容を時期によって異にする、主として状況論の文脈のなかで述べられた、と考えられる<sup>23</sup>。

1928年以降、魯迅がマルクス主義（マルクス主義文芸理論を主として）の思想と本格的に接触し受容する場合、彼は当時の、自立した個人としての自己（個性・内部要求）に基づいて受容したと思われる。この場合、私は、思想（思考作用の結果生じた、ある程度体系をなした意識内容、社会的意識）と精神構造（自己・個性・内部要求として持続的に現れる精神構造、すなわち精神の深部で動態的に働く精神構造）を区別して想定する<sup>24</sup>。魯迅は自己に基づいてマルクス主義を受容し、史的唯物論に基づく階級闘争と階級意識等を考察し、受容していったと思われる。しかしそのマルクス主義に基づく思想は、当時の魯迅のすべての領域・深度における意識と重なるものではないと思われる（思想のレベルとは異なる、自己・個性・内部要求として持続的に現れる精神構造を私は想定する）。マルクス主義の思想は魯迅の意識のすみずみまで統括するものではなく、ほかの深度・領域に浸透し統括しつつ、主として思想（社会的意識）として存在したと推測する。マルクス主義の思想は、それぞれの個人によって、受容の範囲によって、浸透力、浸透範囲、浸透の仕方が異なるものと思われる。それと同時に、マルクス主義の思想の受容をつうじて、自己・個性・内部要求（それらを支える精神構造）自体がその受容の深さの程度において変化・進展していったと思われる。魯迅はあくまで、その後の変化・進展した自

己、自立した個人としての自己（個性・内部要求）に誠実に基づき（これが魯迅の精神の深部で動的に働く精神構造の現れである）、中国変革の諸課題について、自己の今後の生き方・文学・社会について（大きく言えば、中国変革と文学の関連について）、マルクス主義文芸理論の思想を導きの糸として創造的に適用しつつ、過渡的知識人として考察し内省を行ったと思われる<sup>25</sup>。

「当陶元慶君の絵画展覽時」（1927・12・13、『而已集』）で魯迅は、過渡的知識人としての生き方、文学芸術に対する基準・尺度を、陶元慶の絵に対する鑑賞に托して述べる。

「彼は決して〈なりけりあらんや〉ではない、なぜなら用いているものが新しい形と新しい色だからである。しかしまた〈Yes〉〈No〉でもない、なぜなら彼は結局のところ中国人であるから。そのためメートルを用いて計るのは、あわない。しかし漢代のなにか<sup>りよし</sup>慮僂尺あるいは清朝の<sup>えいぞう</sup>营造尺を用いることもできない、なぜなら彼はまたすでに現在の間人だからである。私は、現在にあって世界の事業に参与しようとする中国人の心の尺度を用いて、計らなければならない、こうしてこそ彼の芸術が分かる、と思う。」これは、その後マルクス主義（マルクス主義文芸理論を主として）を受容する場合にも、過渡的知識人魯迅の一貫した姿勢であったと思われる。すなわち過渡的知識人魯迅は、中国の「現在にあって世界の事業に参与しようとする中国人の心の尺度を用いて」（すなわち中国の過渡的現状にある自己の心の尺度に基づいて）、1928年以降マルクス主義の思想を受容しつつ、それを導きの糸として中国の現実に対して創造的に適用しようとした、と思われる。

#### Ⅳ、さいごに

1925年頃魯迅は、麻痺した目覚めぬ民衆に対して、シェヴィリョフ的な憎悪・憤激の感情をもっていた。国民の精神・思想改革が社会改革の課題とされた。しかしその頃、他面、抑圧されてきた民衆の状況を弁護する一

面を見せた。1926年頃さらに民衆の潜在的力量（王朝・社会が混乱を極めたとき農民革命軍として蜂起するような潜在的力量）を認めた。

また1925年の女師大事件をつうじて、魯迅は軍閥政府とそれに結託する知識人の役割に注目するようになる。その後1925年末、魯迅は、民衆に対するシェヴィリヨフの憎悪から基本的に脱却し、1926年三・一八惨案における軍閥政府の凶暴な武力弾圧の経験をつうじて、軍閥政府の支配権力構造に中国変革の緊要な課題を見ることになった。このような過程をへて、魯迅には改めてあるがままの民衆像を再把握しようとする契機が強化された。

『朝花夕拾』にその営為が現れている。『朝花夕拾』の作品の一部は、語り手魯迅が下層の民衆（故郷の民衆）の現実の生活を回想し、彼らの心情に共感し、時には感情移入したものであると考える。それは、魯迅が麻痺した目覚めぬ民衆の現状という事実を軽視したことを意味しない。大まかに言えば、魯迅の民衆観は1925年頃以前の、挫折した改革者の立場に基づいた目覚めぬ民衆に対する憎悪と、当為としての民衆の理想化（素朴な民）から変化しはじめた。それは、1926年から27年始め頃にかけて、現実の民衆に対するあるがままの認識（肯定的、否定的面を含めて）と共感への変化として現れたと考える。下層の民衆の現状に対する魯迅のあるがままの認識と共感は、1928年以降マルクス主義文芸理論との本格的接触と受容をして以降、彼が下層の民衆に対する正負を含めた全面的な社会科学的理解への努力と、具体的な啓蒙の内容・手段を模索することにつながっていったと思われる。

言い換えれば、魯迅は1918年から1925年頃以前にかけてのように、挫折体験した改革者の心情に基づいて麻痺した目覚めぬ民衆の存在（愚民）を憎悪するのではなく、また中国変革を望む改革者の立場から素朴な民を当為として先験的に措定するのでもない。1926年以降民衆の実情とその心情をあるがままに把握しようとし、民衆のおかれてきた歴史的社会的状況を視野に入れようとした。すなわち1926年から27年始めにかけて、故郷の民

衆の正負の現状を事実としてあるがままに把握し、ときには感情移入をと  
もないながら回想の中に汲みとろうとした（『朝花夕拾』の営為）、と思わ  
れる。私はそれを、下層の民衆の現状に対するあるがままの認識（肯定的  
側面と否定的側面を含めて）と共感と呼んでおきたい（しかしそれととも  
に、1928年の雑文に見られるように、魯迅には民衆の目覚めぬ現状に対す  
る認識が貼りついて存在していた<sup>26</sup>）。すなわち魯迅の民衆像は、『人道主  
義』と『個人的無治主義』という二つの思想の起伏消長（『魯迅景宋通信  
集』二四、1925・5・3、前掲）の過程を構成する一環から徐々に脱却して  
いく。その民衆観と表裏をなすものとして、上等人（「芝居をする虚無党」、  
支配者層）に対する批判と反感が存在した。

また1928年以降魯迅は、マルクス主義文芸理論と本格的に接触し受容  
しつつ、それを導きの糸として中国の現実に創造的に適用しようとする  
とき、革命的知識人と民衆との連帯の課題や、民衆啓蒙の内容・形態（手段）  
を提案しようとしたと思われる。そのとき、1927年四・一クーデターの  
影響によって、①魯迅は文学活動において遠い将来の課題ではなく、南京  
国民政府の強圧下の現実の旧社会の問題として具体的に提起することが必  
要であるとした、と思われる。また、②啓蒙の内容・手段の問題について、  
民衆に実際にとどくような文芸活動をいかに行うべきか、が魯迅に問われ  
たと思われる。魯迅は文芸を社会現象として位置づけ、その社会現象を民  
衆が受け手として、どのように受けとることが可能であるのか、を追求す  
る必要があった<sup>27</sup>。

さらに、魯迅の社会像における民衆についていえば、1933年に次のよう  
な言及がある。

「近頃の読書人はいつも、中国人が散沙のようであって、考えるべき方法  
もないと慨嘆し、運の悪い責任をみんなに帰している。実際これは大部分  
の中国人に無実の罪を着せるものだ。小民は無学であり、事を見るのに不  
明ではあるかもしれないけれども、しかし自身の利害にかかわることを知  
るとき、団結しえないであろうか。以前には役所の前で焼香しての訴え、蜂

起、謀反があった。現在でも請願の類がある。彼らが砂のようであるのは、支配者によってうまく治められたのである。」(「沙」、1933・8・15、『南腔北調集』)

魯迅は1933年の段階においては、民衆が必ずしも散沙でないとする。民衆は自身の利害にかかわるとき、実際に行動して、請願し、蜂起し、謀反したとする。そして現在でも民衆の請願の類が存在する。

「それでは、中国には沙はないのだろうか。あることはある、しかし小民ではなく大小の支配者である。

人々はまたよく次のように言う、『昇官発財〔出世と金儲け——中井注〕』と。実はこの二つは並列されるものではない。昇官しようとする理由は、ただ発財しようとするためであり、昇官は発財の道にすぎない。だから官僚は朝廷に依存しながらも、決して朝廷に忠ではない。吏役は役所に依存しながらも、決して役所を大切にしない。頭領が清廉の命令を出すと、手下は決して従うことがない。対処の方法には『蒙蔽〔欺くこと——中井注〕』がある。彼らはすべて私利私欲の沙であり、己を肥やすことができるときには肥やす。しかもどの一粒も皇帝であり、帝を称することができるころでは帝を称する。或る人々はロシア皇帝を『沙皇〔ツァー——中井注〕』と呼ぶが、これをこのやからに送れば、きわめてふさわしい尊号である。財はどこから来るのか。小民の身から削ぎおとすものである。小民が団結しうるなら、金儲けは面倒なことになる。それで、当然できるだけ方法を考えて、彼らを散沙に変化させなければならない。沙皇によって小民を治める、そこで全中国は『一皿の散沙』となった。」(「沙」、1933・8・15、『南腔北調集』)

1933年において、魯迅は中国の民衆は必ずしも散沙ではないとする。民衆は請願し、蜂起し、謀反した。しかし散沙のような大小の沙皇(支配者層)によって民衆が巧妙に分断して統治され、搾取されている。その結果、全中国(民衆を含めて)が散沙の状況を呈している、とする。中国の大小の支配者層による巧妙な分断統治を指摘する。

ここにおいて魯迅は、全中国の現状の散沙のような状況について民衆の国民性自体に原因を求めめるのではなく、すなわち国民性を第一動因としてみるのではなく、歴史的諸条件と当時の社会状況を分析し、そこに発生の原因を求め、歴史的社会的所産としての散沙の現状(国民性として現れる)を論じていると言える。ここにはマルクス主義(この場合の史的唯物論)を受容した魯迅の新しい姿勢がうかがわれる<sup>\*28</sup>。

1928年以降、マルクス主義と本格的に接触し受容していった文学者魯迅の民衆像と知識人像は、どのようなものであったのだろうか。このことを今後の課題とし、さらに追究したい。

## 注

\*1: その後、私が目をとおした小論の主題に関する論文等を次に掲げる。以下適宜に、小論の中で具体的に言及することにする。

[中国語文献]

①「魯迅与進化論」(錢理群、『中国現代文学研究叢刊』1980年第2期、底本は『魯迅其人』〈社会科学文献出版社、2002・3〉)

②「魯迅提出改造“国民性”及其認識的發展」(胡炳光、『魯迅“国民性思想”討論集』、鮑晶編、天津人民出版社、1982・8)

③「進化論在魯迅后期思想中的位置——從翻譯普列漢諾夫的『芸術論』談起」(周展安、『中国現代文学研究叢刊』2010年第3期、総第134期)

[日本語文献]

①『魯迅と革命文学』(丸山昇、紀伊國屋書店、1972・1・31)

②「『魯迅評論選集』について」(山田敬三、東方書店、1981・1・25)

③「『藤野先生』と日暮里——慙光景之誠信兮身幽隱而備之——」(上)(谷行博、『大阪経大論集』第158号、1984・3・30)

④「魯迅が仙台医学専門学校を退学した事情について——授業ノートからの検討——」(坂井建雄、『野草』第87号、2011・2・1)

\*2: 広州に波及したのが、4月15日であった。ここでは、「四・一二クーデター」を一連の事件の経過を意味するものとして使用する。

\*3: 魯迅のこの点についての考え方は、前掲の「魯迅を語る——北支那の白話文

学運動——」（山上正義、『新潮』第25巻第3号、1928・3）、「鐘楼上——夜記之二」（『語絲』第4巻第1期、1927・12・17、『三閑集』）、「通信」（1928・4・10、『三閑集』）に窺われる。

また魯迅は、「慶祝滬寧克復的那一辺」（1927・4・10、『集外集拾遺補編』）で次のように言う。国民革命の進展が順調である現在、革命をさらに進撃させなければならない。革命の進展を祝賀することは、革命とは関係がないとする。

「このような人〔革命を祝賀する人——中井注〕が多くなれば、革命の精神はかえって浮つき、希薄となることから、消失する結果になり、さらに続いて旧に復する。

広東は革命の策源地であるが、このために先に革命の後方ともなっている。それがゆえに上に述べた危機が真っ先に存在する。」（「慶祝滬寧克復的那一辺」、1927・4・10、『集外集拾遺補編』）

「革命時代的文学」（1927・4・8講演、『而已集』）では次のように言う。

「中国にはこの二種類の文学——旧制度に対する挽歌、新制度に対する謳歌——はありません。なぜなら中国革命はまだ成功していません、まさしく端境期であり、革命に忙しい時期であるからです。しかし旧文学は依然として多いです。新聞の文章はほとんどすべて旧式です。私が思いますに、これは中国革命が社会に対して大きな改変をしていない、守旧的な人に対して大きな影響を与えていない。だから旧い人がなお超然としていることができるのです。広東の新聞紙が語る文学はすべて旧いもので、新しいものは少ない。これも広東の社会が革命の影響を受けていないことを証明しています。新しいものに対する謳歌がなく、旧いものに対する挽歌もない。広東は依然として十年前の広東です。こればかりではなく、さらに苦痛を訴え、不平を鳴らすこともない。ただ労働組合がデモに参加するのを見ます、しかしこれは政府が許可したものであり、圧迫があるために反抗するのではなく、上からの命令を受けた革命にすぎません。中国社会は改まっています、だから懐旧する哀詞がなく、斬新な行進曲もありません。ただソビエト・ロシアにはすでにこの二種類の文学が生まれています。」（「革命時代的文学」、1927・4・8講演、『而已集』）

\*4：魯迅は「我們現在怎樣做父親」（1919、『墳』）で次のように言う。

「私が今心にそのとおりに思う道理は、極めて簡単である。すなわち生物界の現象に基づいて、一、生命を保存しなければならない。二、この生命を継続しなければならない。三、この生命を發展させなければならない（すなわち進化である）。生物はすべてこのようにしているし、父親もこのようにするのである。」

(「我們現在怎樣做父親」、1919、『墳』)

「生命はどうして受け継いでいく必要があるのか。すなわち発展しなければならず、進化しなければならぬからである。個体は死を免れることができず、進化もまたいささかも止まることがない、そのため継続し、この進化の道を歩くしかないのである。この道を歩くにはある種の内的努力がなければならない。例えば単細胞動物に内的努力があって、それを積み重ねて複雑になるだろう。無脊椎動物に内的努力があって、それを積み重ねて脊椎が発生する。だからあとから起こる生命は、必ずそれ以前のものよりいっそう意義があり、いっそう完全に近い。このためにさらに価値があり、さらに尊い。前者の生命は、後者の犠牲とされるべきである。」(同上)

生命の進化のための内的努力をとおして、生物が進化する。それゆえにあとから起こる生命は、それ以前のものよりいっそう意義があり、いっそう完全に近いとされる。

\*5: 私はこのことについて、「魯迅『祝福』についてのノート(一)——魯迅の民衆観から見る」(『南腔北調論集』、東方書店、2007・7・1)の注11で述べたことがある。

\*6: 『魯迅景宋通信集』九八(1926・12・2、前掲)で魯迅は次のように言う。「私は現在、文章を書く青年に対して、実際少し失望しています。希望のある青年はたいてい戦争に出かけてしまったようだと思います。筆墨を弄するものにしたっては、幾分なりとも本当に社会のためというものを見ません。彼らは多くは新しい看板を掲げた利己主義者です。」

\*7: 『三閑集』序言(1932・4・24、『三閑集』)で魯迅は次のように言う

「私はこれまで進化論を信じていた。いつも、将来は必ず過去に勝り、青年は必ず老人に勝ると思っていた。青年に対しては、これをいつも尊重し、しばしば十太刀を受けても、私は一矢をお返ししたにすぎない。しかし後に私は間違っていたとわかった。これは唯物史観の理論或いは革命文芸の作品が私を惑わしたからではない。私が広東で、同じく青年でありながら両陣営に分かれ、或るいは投書して密告し、或いは警察を助けて人を捕らえる事実を目撃したからである。私の考え方はこれによって音をたてて崩れ、後にいつも疑いの目で青年を見、二度と無条件の畏敬をもつことがなくなった。」

しかし魯迅は、広州の四・一五以降、行方不明になった左翼の青年畢磊に対して哀惜を述べているところに見られるように(「怎麼写——夜記之一」、半月刊『莽原』第18・19期合刊、1927・10・10、『三閑集』)、進化論についての魯迅の懐



疑とは、あらゆる青年に対して無条件の畏敬をもたなくなったという事情であると思われる。

それは進化論を中国変革の過程に適用するという、魯迅がとった自己の考え方・生き方の一つの崩壊と言える。その無条件の信頼とは次のような内容である。「後に続く生命は、必ずやそれ以前の生命よりいっそう意義があり、さらに完全に近く、このためにいっそう価値があり、尊いものである。前者の生命は後者の犠牲とならなければならない。」（『我們現在怎樣做』、1919・10、『墳』）

それゆえ私は、1927年4月以降、魯迅の進化論が理論として全面的に崩壊したとは考えない。崩壊したのは進化論を中国変革の過程に適用するという、魯迅の考え方・生き方の一つが、崩壊したと思われる。そして生物の進化の理論として魯迅の進化論は基本的に、マルクス主義の受容のための一つの基礎となったと考える。

\*8：魯迅は、「怎麼写」（1927・9・15、『莽原』半月刊第18、19期合刊、1927・10・10）で中山大学の学生畢磊について次のように言う。

『『做什么』が出版された後、かつて私に5冊送ってくれたことをまだ覚えている。私は、この団体が共産主義の青年の主宰するものだと思った。なぜならその中に〈堅如〉、〈三石〉等の署名があったからで、畢磊に違いない、通信場所も彼であったからである。彼はまた以前10数冊の『少年先鋒』を送ってくれた。この刊行物の中身は明らかに共産主義青年の作るものであった。はたして、畢磊君はおそらくきっと共産党だったのだろう。4月18日、中山大学で逮捕された。私の推測によれば、彼は必ずやとっくにこの世にはいなくなっているであろう、見たところ瘦せて小柄な、聡明で実行力のある湖南の青年であった。』

\*9：「魯迅与進化論」（錢理群、『中国現代文学研究叢刊』1980年第2期、底本は『魯迅其人』〈社会科学文献出版社、2002・3〉）は、1927年四・一ニクーデターの影響を次のように指摘する。

「きびしい階級闘争の実践的検証は、魯迅に対してきびしい真理を啓示した。『生物学の一般概念が、もしも社会科学の領域にもちこまれるならば、空論に変わるであろう。』（《レーニン選集》第2巻336頁）魯迅が『答有恒先生』の中で、『自分も宴席をならべるのを手伝った』ことを責め、そして『今また八方平穩無事な〈子供を救え〉』というような議論を行うとすれば、自分が聞いてさえ虚しいと感ずる』理由は、これは血の教訓によってついに彼に次のことを認識させたためである。『生物学の一般概念』を『社会科学の領域』にもちこんだこの思想は、客観的には支配階級を手伝うものにほかならない。これ以前において、魯迅はす

で進化論の消極的影響に対して清算をしていたけれども、しかし、この点については明らかに認識が不足していた。」(446頁)

\*10：馮雪峰は、『回憶魯迅』（人民文学出版社、1952・8、31頁、底本は『魯迅卷』第8編〈中国現代文学社編〉）において、1929年前半における魯迅の発言を次のように記す。

「『進化論は私にとってやはり役に立ち、結局のところ一筋の道を指し示してくれました。自然淘汰を理解し、生存競争を信じ、進歩を信じました。それは理解せず信じないことに比べれば、良かったのです。ただ人類には階級闘争があることを知らなかつただけです。……』」

\*11：魯迅はいつ頃から階級闘争を理解するようになったのであろうか。馮雪峰は『回憶魯迅』（人民文学出版社、1952・8、30頁－31頁、底本は『魯迅卷』第8編〈中国現代文学社編〉）において、蒋介石による四・一二クーデターが階級闘争であったとする、1929年前半の魯迅の発言を次のように記す。

「『今回もやはり青年が私に教訓を与えました。……私は進化論を信じて、青年は必ず老人に勝り、世の中で青年を圧迫し殺害する者はたいい老人である。老人が早く死ねば、だから将来はより良くなるであろう、と思っていたのです。しかしそうではなく、青年を殺害する者は青年であり、あるいは密告し、あるいは自ら捕縛しました。以前軍閥が青年を殺したとき、私は悲憤しました。今回はもう悲憤する時間もなく、驚いて呆然となってしまいました。私の進化論は完全に破産した。』

『階級闘争は、人が承認しなくても良い。事実の教訓は必ず理論の宣伝より有力です。』

『階級闘争は、確かに人を驚かせ寝食を不安にさせるでしょう。しかし誰がまず階級闘争を実行するのか。口先で宣伝する人ではなく、口には言わず、世の中に階級闘争があることを承認しない人です。革命者ではなくて、手に刀をもった反革命者です。』

このように、1929年前半の段階において魯迅は、1927年の四・一二クーデターを階級闘争の実例と認識した。

四・一二クーデターを階級闘争であると魯迅が認識し確信できるようになった時期は、おそらく、革命文学論争において創造社等の魯迅批判が行われ、魯迅がマルクス主義の文献と本格的に接触するようになった、1928年以後のことと推測する。というのも、1927年4月12日の蒋介石による四・一二クーデターの直後、魯迅は当初、そのクーデターを政治的に分析し理解することができなかつたと思

われる。

「私は1927年、血によって驚かされて呆然となり、広東を離れました。口ごもり、まっすぐに言う度胸のなかったそれらの言葉は、すべて『而已集』に載っています。」(『三閑集』序言、1932・4・24)

当時の創造社の成員が、例えば郭沫若、郁達夫、成仿吾、王独清等が、当時の政局の動向をクーデター以前に明晰に政治的に把握していたことと比べれば、その差は歴然としている。ただ、「怎麼写」(1927・9・15、『莽原』半月刊第18、19期合刊、1927・10・10、『三閑集』)で魯迅は、次のように言う。

「郁達夫氏には『洪水』の『在方向轉換の途中』(『洪水』第3巻第29期、1927・3・16、底本は『郁達夫全集』第7巻(浙江文芸出版社、1992・12)——中井注)一篇があり、このたびの革命は階級闘争の理論の発現であると言っているのに、記者の方は民族革命の理論の発現であると思っているのである。おそらく英雄主義は今日において適さない等の言葉もあったのであろう。そのため(中傷)とか(挑発離間)と考えられ、郁達夫氏は(休みなさい)でなければ、ならなかったのだろう。」

ここでは、国民革命(「このたびの革命」)が階級闘争と考える郁達夫の言葉を引いている。こうしたとらえ方を、理論として確認していくのが、1928年以降のことと私は考える。この点については、なお今後の課題として具体的に追究したい。

\*12:「芸術について」(プレハーノフ、『芸術論』、外村史郎訳、叢文閣、1928・6・18、底本は第7刷(1929・10・3)、『芸術論』、魯迅訳、1929・10・12訳了、光華書局、1930・7)は次のように言う(旧字体は新字体に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改め、送り仮名はそのままとし、傍点を省略した)。

「一般的に言って、私によって擁護されつつある歴史観にダーウイニズムを対立させようとするのは、非常に奇異なことである。ダーウインの領域は全く他にあった。彼は、動物種としての人間の起源を考察したのである。唯物史観の支持者はこの種の歴史的運命を説明せんと欲する。彼等の研究の領域は丁度ダーウイニストの研究の終わるところ、其処から始まる。彼等の研究はダーウイニストが吾々に與える所のものに、とって代わることは出来ない、それと全く同様にダーウイニストの最も輝かしい発見も、彼等の研究にとって代わることは出来ないが、ただ彼等の為に地盤を準備することが出来るのみである。(中略)ダーウインの学説は正に然るべき時に、生物学の発達における大なるまた必然的な進歩として現れた、当時この科学がその研究者達に提出しえた限りの要求中の、最も重

要なるものを完全に満足させることによって。何等か同様のことを唯物史観についても言うことが出来るか？彼は正に然るべき時に社会科学の発達における、大なるまた必然的な進歩として現れたと断言することが出来るか？そしてそれは、今やその一切の要求を満足せしむることが可能であるか？これに対して私は十分なる確信をもってこう答える、然り、——出来る！然り……可能である！」

\*13：「魯迅与進化論」（錢理群、『中国現代文学研究叢刊』1980年第2期、底本は『魯迅其人』〈社会科学文献出版社、2002・3〉）の論旨を受け継いだ、「進化論在魯迅后期思想中的位置——從翻譯普列漢諾夫的『芸術論』談起」（周展安、『中国現代文学研究叢刊』2010年第3期、総第134期）は、この転換の内容を次のように指摘する。

「第一に、進化論は魯迅後期思想において基本的に、自然科学的内容とされて把握された。そして第二に、自然科学としての進化論は、肯定的な在り方で魯迅の後期思想の中にずっと存在した。しかし第三に、進化論は主要な対象として魯迅に注目されたのではなく、後期魯迅の注目の重点となったのは、マルクス主義思想学説を主要な内容とする社会科学である。」

\*14：魯迅は、韋素園宛て書簡（1928・7・22）で次のように言う。

「史的唯物論によって文芸を批評する本は、私も以前すこし読みました。それは極めて単刀直入であり、多くの曖昧で難解な問題が、すべて説明できると思いました。しかし近頃創造社一派は、あらゆるものはこの史観によって著作しなければならないと主張し、自分ではまた分かっていず、收拾がつかなくなっています。」（韋素園宛て書簡、1928・7・22）

\*15：『労働者シェヴィリョフ』に関するこの部分の論述は、「魯迅と『労働者セヴォリョフ』との出会い（試論）〈上〉」（『野草』第23号、中国文芸研究会編、1979・3・31、のち『魯迅探索』〈汲古書院、2006・1・10〉の第2章に所収）、「魯迅と『労働者セヴィリョフ』との出会い（試論）〈下〉」（『野草』第24号、中国文芸研究会編、1979・10・1、のち『魯迅探索』〈汲古書院、2006・1・10〉の第2章に所収）に基づく。

\*16：魯迅は「『華蓋集』題記」（1925・12・31、『華蓋集』）で次のように言う

「またある人はこのような短評を書いてはいけないと勧める。その好意に、私は感激するし、しかも創作の尊ぶべきことを知らないのではない。しかしこのようなものを作りたいときには、恐らくやはりこのようなものを作るであろう。」魯迅は、雑感文によって現実の中で戦い、傷ついたその傷痕を大切に思うものであることを述べている。

馮雪峰は『回憶魯迅』（人民文学出版社、1952・8、底本は『魯迅卷』第8編〈中国現代文学社編〉）で次のように言う。

「もちろん、魯迅先生はなお別の方面に發展することができた、すなわち雑文の方向に發展した。

ここで、私もついでに二点言及したい。一つは、魯迅先生が雑文の方向に向かって發展したのは、私たちがすでに言ったことだが、雑文が彼にあってはいつそう鋭利な武器であり、彼の戦闘に適合していたことによる。しかし上に言った状況を見ると、後期において彼は、労農の闘争に関する小説を書きようがなかった。これも彼がもっぱら雑文の方向に發展した原因の一つである。」（95頁）

また、馮雪峰は「关于魯迅在文学上的地位」（1936・7・20、『雪峰文集』第4卷、人民文学出版社、1985・7）の「附記」（1937・3・4）で次のような魯迅の言葉を紹介する。

「先生も、彼の雑感・散文が思想的意義のほかに、高い、しかも独創的芸術であるという評価に同意し、さらには慨嘆して言った。『こうした評価をしたのはただ何凝〔瞿秋白を指す——中井注〕が一人いるだけだ。同時に、私は章士釗や陳源のたぐいを攻撃したが、それは彼らを社会的な一種の典型であるとした点を見抜いたのも、何凝一人しかいない。私は実際いわゆる前進的批評家にあまり感心しない。彼らは目で社会を見ずに、魯迅は人をののしることが好きだと思っている。私が戦場で人と戦うとき、彼らは背後で冷笑する……』そこで、先生の雑感・散文を、先生の独創的なものであると見なし、すなわち西歐文学には稀であるとする、そしてそれが中国の散文に深い淵源をもっていることに、先生も正しいと考えた。」

しかし1928年以降、魯迅は『故事新編』（上海文化生活出版社、1936・1）に収められた、「理水」（1935・11・29）、「採薇」（1935・12）、「出閩」（1935・12）、「非攻」（1934・8）、「起死」（1935・12）等の小説を書いている。また、ほかの小説を書く意思があったことも、『回憶魯迅』（馮雪峰、94頁）から分かる。このように1928年以降、魯迅が小説を書かなかったわけではなく、また翻訳、版画等の活動も少なからぬ比重を占めていたことに注意したい。しかし1928年以降、雑文（雑感・評論を含めて）が魯迅の文学活動の主流となったと思われる。

\*17：魯迅は、「阿Q正伝の成因」（1926・12・3、『華蓋集続編』）で、死刑執行をめぐる刑場と民衆の様子が、あたかも900年前の包龍図旦那の時代と変わらないことを述べていた。また、「鏟共大観」（1928・4・10、『三閑集』）で、共産黨員処刑後の死体と首級を見物する民衆が紹介される。魯迅は、このような民衆の現

実を受けとめ、そのうえで民衆を啓蒙する課題（内容・手段）を、考えなければならなかったと思われる。

こうした問題意識に基づき、魯迅は、片上伸の「文学の読者の問題」（1926・4、『文学評論』、新潮社、1926・11・5、魯迅1927年11月入手）から学ぶところがあり、読者という観点を導き入れることをつうじて、文学を社会現象の一つとして位置づける（『文芸与革命』、1928・4・4）ようになったと思われる（『ブローク・片上伸と1926年～29年頃の魯迅についてのノート〈上〉〈下〉』、『大分大学経済論集』第36巻第5号、第6号、1985・1・20、2・20、のちに『魯迅探索』〈汲古書院、2006・1・10〉の第11章に所収）。すなわち民衆という読者（啓蒙の対象者）の文化的レベルを考慮して、啓蒙の内容・手段の模索が必要であった。

\*18：「関于知識階級」（1927・10・25講、『集外集拾遺補編』）で魯迅は次のように言う。

「要するに、思想が自由になると、〔集団としての——中井注〕能力が減少し、民族が立ちいかなくなり、彼自身も立ちいかなくなる。現在思想の自由と生存とは衝突がある、これは知識階層自身の欠点である。

しかし知識階層はどのようにするのだろうか。指揮刀のもとで命令に従い行動するのか、それとも民衆に傾く思想を発表するのだろうか。もし意見を発表するのなら、思ったことを言わなければならない。」

「彼ら〔知識階層——中井注〕は社会に対していつも満足することができない、感受するものはいつも苦痛である、目にするものはいつも欠点である。（中略）環境はやはり旧いままであり、絶えず人に墮落するようにさせる。もしもこの旧い社会と奮闘するのでなければ、やはり旧い道に戻るであろう。」

この「関于知識階級」の中で魯迅は基本的に、1927年10月当時の中国の政治状況、社会状況を念頭において、知識人の生き方を述べていると思われる。

\*19：「片山智行氏に答える」（丸山昇、『未名』第2号、1982・9）は、「魯迅の各状況下での〈相〉を重視する」ことで、魯迅の精神・思想を明らかにする研究姿勢を述べる。「革命文学」（『民衆旬刊』第5期、1927・10・21、『而已集』）における指揮刀の下の「革命文学」、「革命文学家」の主張に対する魯迅の言及は、当時の中国の「各状況下での〈相〉」によって理解できる内容と思われる。

\*20：『魯迅と革命文学』（丸山昇、紀伊國屋書店、1972・1・31）に詳しい。

\*21：1928年以前の1925年に、マルクス主義文芸理論との接触があり、そのことをどのように受けとめたかについては、「魯迅と『蘇俄的文芸論戦』に関するノート」（『大分大学経済論集』第34巻第4・5・6合併号、1983・1・20、のちに『魯

迅探索』〈汲古書院、2006・1・10〉の第9章に所収)で述べたことがある。『蘇俄的文芸論戦』(任国楨訳、北京北新書局、1925・8)では、プレハーノフの新旧文学の継承の問題、マルクス主義文芸論の諸問題があつかわれていた。また、魯迅は1926年から1928年にかけて、『壁下訳叢』(上海北新書局、1929・4)の訳業をつうじて、旧文学からプロレタリア文学への批判的継承と発展を保障する、両者の接点としての文学の特質(文学が自己・個性・内部要求に基づくものであること)を確認し、またそこで、革命的知識人と民衆の連帯の問題について解明した。この点については、「魯迅と『壁下訳叢』の一側面」(『大分大学経済論集』第33巻第4号、1981・12・21、のちに『魯迅探索』〈汲古書院、2006・1・10〉の第10章に所収)で述べたことがある

魯迅がマルクス主義と本格的に受容するのは、革命文学論争が始まる1928年以降と思われる。しかしそれ以前においても、魯迅は、マルクス主義文芸理論と接触があり、過渡的知識人として上記の問題について、1925年から28年にかけて、さまざまな文芸上の問題、革命的知識人と民衆の連帯の問題等について解明に向けて努力していた。

\*22: この点については、「魯迅と『壁下訳叢』の一側面」(『大分大学経済論集』第33巻第4号、1981・12・21)の注で述べた。のちに『魯迅探索』(汲古書院、2006・1・10)の第10章の注21にあたる。

\*23: 「文芸与政治的岐路」(1927・12・21講演、『集外集』)で述べられた考え方(文学と政治権力の関係について)について、その後も一貫するような魯迅の原理論的側面を見ようとするならば、その中のどのような考え方が原理論としてあり、それが1930年代以降も一貫したのかを、その後の、1930年代における魯迅の具体的活動の中で、検証することが必要であると思われる。「『魯迅評論選集』について」(山田敬三、東方書店、1981・1・25)は次のように論ずる。

「魯迅の文芸に対する態度は、革命文学論争を経ることで、それ以前とは根本的に異なる別なそれに転化したというようなものではない。例えば『文芸与政治的岐途』という講演記録で表明された魯迅の文芸および政治に対する観点が、論争後に突如として一変したとはとうてい考えられないのである。」(4頁)

私は、「『魯迅評論選集』について」(山田敬三、前掲)の考え方を一つの重要な問題提起と受けとめる。私はこの点について具体的な検証が必要である、と考え、今後この問題を視野に入れて考えていきたい。

1928年以前の1925年に、マルクス主義文芸理論との接触があり、そのことをどのように受けとめたかについては、私は「魯迅と『蘇俄的文芸論戦』」に關す

るノート」(『大分大学経済論集』第34巻第4・5・6合併号、1983・1・20、のちに『魯迅探索』(汲古書院、2006・1・10)の第9章に所収)で述べたことがある。『蘇俄的文芸論戦』(任国楨訳、北京北新書局、1925・8)では、プレハーノフの新旧文学の継承の問題、マルクス主義文芸論の諸問題があつかわれていた。また、魯迅は1926年から1928年にかけて、『壁下訳叢』(上海北新書局、1929・4)の訳業をつうじて、旧文学からプロレタリア文学への批判的継承と発展を保障する、両者の接点としての文学の特質(文学が自己・個性・内部要求に基づくものであること)を確認し、またそこで、革命的知識人と民衆の連帯の問題について解明した。この点については、「魯迅と『壁下訳叢』の一側面」(『大分大学経済論集』第33巻第4号、1981・12・21、のちに『魯迅探索』(汲古書院、2006・1・10)の第10章に所収)で述べたことがある。

魯迅がマルクス主義と本格的に接触し受容するのは、革命文学論争が始まる1928年以降と思われる。しかしそれ以前においても、魯迅は、マルクス主義文芸理論と接触があり、過渡的知識人として上記の問題について、1925年から28年にかけて、さまざまな文芸上の問題、革命的知識人と民衆の連帯の問題等について解明に向けて努力していた。

\*24: この区別を用いて、「『魯迅 自覚なき実存』(山田敬三、大修館書店、2008・11・1、406頁)をめぐっての感想」(『季刊中国』第99号、2009・12・1)という拙文を書いたことがある。ここでも、自己・個性・内部要求を、精神の深部で動態的に働く精神構造に規定されて持続的に現れるもの、と理解する。

\*25: 過渡的知識人の生き方・選択の仕方には、それぞれの社会的状況、それ以前の思想的状況、気質等により、さまざまであった。例えば、郭沫若は、小資産階級としての自我(思想・社会意識)を切り捨て、飛躍を試みたようとした(「郭沫若『革命与文学』における『革命文学』提唱についてのノート」(上)(下)、『言語文化論集』第12巻第2号、第13巻第1号、名古屋大学総合言語センター、言語文化部、1991・3、11、のちに『一九二〇年代中国文芸批評論』(汲古書院、2005・10・5)の第1章に所収)。

\*26: 例えば、「太平歌訣」(1928・4・10、『三閑集』)、「鑿共大観」(1928・4・10、『三閑集』)に表現される民衆像である。

\*27: 魯迅は後年、受け手の水準に応じた文芸の働きかけを行おうとする。「関于翻訳的通信」(1931・12・28、『二心集』)で魯迅は次のように言う。

「私が思いますに、私たちの翻訳書は、まだこんなに簡単にはいきません。まず大衆のうちどのような読者のために翻訳するのか、を決めなければなりません。



これらの大衆を大ざっぱに分けてみます。甲は教育をよく受けたもの、乙は少し字が理解できるもの、丙は知っている字がほとんどないものです。そのうちの丙は『読者』の範囲外であり、彼らを啓発するのは絵画・講演・演劇・映画の任務であって、ここで論じなくてもよいと思います。しかし甲乙の二類にあっても、同じ書物を使用するのは不可能です。各々に読書のために提供する相応の書物がなければなりません。乙に提供するのには、まだ翻訳書を用いることはできません。少なくとも改作、もっともよいのはやはり創作です。』

魯迅はここで、中国社会の大衆のさまざまな知的水準に応じた啓蒙活動を提起している。

\*28: プレハーノフは『芸術論』(外村史郎訳、叢文閣、1928・6・18、魯迅訳、光華書局、1930・7、1929・10・12訳了)において次のように言う。

「スタール夫人の意見によれば、国民性は歴史的条件の所産であるということに注意することだ。しかし国民性は、若しもそれが与えられた国民の精神的特質の中に現れたものとしての人間の本性でないとしたら、何であるのか? (中略)

そして若しも所与の国民の本性がその歴史的発展によって創造されるならば、それがこの発展の第一動因であり得ないことは明らかである。がここからは文学——国民の精神的本性の反映——はこの本性がそれによって創造される歴史的条件そのものの所産であるということが出て来る。それは人間の本性ではなく、与えられた民族の性質ではなく、彼の歴史および彼の社会的構造が彼の文学を説明することを意味する。この観点からスタール夫人はフランスの文学を観察してもいるのである。彼女によって十七世紀のフランス文学に献げられた一章は、この文学の主たる性質を当時のフランスの社会・政治関係と、その帝王権に対する関係の中に観察されるフランスの貴族階級の心理とによって説明しようとした、極めて興味ある試みである。」(『芸術論』、外村史郎訳、61頁)

1928年以降マルクス主義を本格的に受容する中で、魯迅はプレハーノフの見解を学んだと思われる。それは、国民性が歴史的諸条件の所産であり、歴史的発展によって作りだされるものであるとする。国民性は、人間の本性ではなく、民族の性質ではなく、その歴史的諸条件と社会構造が生みだしたものであるとする。

全中国が散沙のような状況にあることについて魯迅は、その歴史的諸条件と社会構造から説明する。

「魯迅提出改造“国民性”及其認識的發展」(胡炳光、『魯迅“国民性思想”討論集』、鮑晶編、天津人民出版社、1982・8)は、「沙」(1933・8・15、『南腔北調集』)における、前期とは異なる史的唯物論の考え方を指摘している。